

厚木市史たより

第24号

令和3年3月30日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

「他界」を展示する意味

—企画展「再生・永遠帰郷の生命」を見る—
あつぎ郷土博物館長（学芸員） 大野一郎

はじめに

あつぎ郷土博物館が開館し、二年が経過しました。本稿では企画展「再生・永遠帰郷の生命」（令和三年三月二十二日から四月十一日まで開催）の概要をお伝えします。

この展示は「もう一つの世界」である他界（あの世）、異界にスポットを当てます。折あしくコロナ禍で多くの人が亡くなる中、不謹慎との誤解を招くようなテーマとなつてしまいました。しかし、このような時だからこそ、人間存在の根本である「生命」について「他界」を通じ、改めて考えたいと思います。

厚木市が収集、調査を進めてきた多くの有形、無形の民俗資料に関する情報は『厚木市史』『文化財調査報告書』などにまとめられてきました。本展はそのデータをもとに、他界のイメージ、実態を実物資料から視覚的に提示することを意図し、取り組み始めたものです。以下、展示に沿ってみていきます。

1 「他界」のイメージ

まずは厚木の人々の他界観を示す民俗事例をとりあげます。

相模を代表する霊山・大山の周辺に住まう私たちは、大山茶湯寺（誓正山涅槃寺）への「百日参り」（死後百日目の供養）の際、「亡くなった人によく似た人に逢える」、「亡

くなった人に逢える」と伝えていきます^①。このような習俗からは大山を亡くなった人が行くところとして考えていたことがうかがえます。

仏教の説く地獄、極楽は遠くはるかな世界を想像させますが、厚木のような大山の一次信仰圏ではそこが「死霊鎮留の地」である蓋然性が高いのです。つまり大山を死後、霊魂の行くところと考え、来世をごく身近なところに引き寄せ、考えていたので

す。また、明治前後の国家的な神道化政策が、大山山中、周辺で特に顕著であったことから、厚木は神道式の葬儀、神葬祭がみられた地でもあります。儀式内容は、全国的に統一されてはいませんが、大山の神官・権田直助が儀礼の趣旨を「葬儀式」にまとめています。権田は、神葬祭の淵源を記紀神話に求め、日本固有の葬儀式とみなす解釈をとり説明します。他界についても同様です。しかし、死だけでなく穢全般を厭う神道は、葬儀になじまないものであり、仏式に戻っていく様や「葬儀式」との乖離の様相からは、他界に関する考えを含む地域の葬儀観がうかがえるよう^④です。

一方、他界とは直接つながらないものの、この世とは違う世界である「異界」の存在も伝えられて^⑤います。

例えば塩川滝（愛川町）にある江ノ島淵。ここへは、四月巳の日、江ノ



図1 宮型霊柩車（有限会社J・F・C所蔵）

島の潮がさし入るといいます。他にも中津川周辺には、江ノ島の稚児が淵へ通じるという場所があります。

滝、淵、池、岩窟、洞窟、山頂、社などは、行き来可能な霊場をつなぐ時空を超えた中世の通路であり、異界の入口でした。特に龍の信仰・弁財天の信仰は地底の空間認識と結びつくものもありました^⑥。

あの世がどこにあると考えられていたのか、厚木という地域に限ってみても、時代、地区、個人により様々でした。その多様性を踏まえた上で、展示はスタートいたします。

（1）『厚木の民俗8人生儀礼』（厚木市教育委員会、1994）。昭和八年、茶湯寺への参詣者は平塚236人、伊勢原116人、厚木は120人（『大山の信仰と歴史』平塚市博物館、1987）。茶湯寺への参詣の多寡にかかわらず、この伝承は広く認知されている実感がある。（2）田中宣一「大山信仰と大山講」『山岳修験第18号』（日本山岳修験学会、1996）。「大山を霊魂鎮留の地とする明確な現在資料は見当たらないが、十分に推測可能」とし「全国の霊山にとって珍しい信仰」とも位置付ける。

（3）権田直助編『葬儀式』（1987）。（4）大野一郎「神葬祭研究の課題―死穢観と浄化儀礼―」『民俗学論叢10』（相模民俗学会、1996）。厚木地域の神葬祭については、①神職による導入（温水）、②自葬による導入（妻田）、③離檀により地域全体で導入（小野、岡津古久）などがみられるが、いずれもインテンシブな調査は行われていない。（5）『あつぎの縁起書の世界』（厚木郷土資料館、2012）。「異界」については今回の紹介から省いたが、同書に詳しく取り上げた。（6）城川隆生氏による本展示のために書き下ろし。同様の指摘は「丹沢の行者道を歩く」（白山書房、2005）にもある。

二 「あの世」の意匠

本展示会の企画意図の中心は、あの世の姿を考えてみることでした。私たちにとって、霊柩車のデザインは強烈で、あの世の入り口的なイメージとも考えられます。

昔から存在しているかのようなデザインは、意外なことに座棺から寝棺への変化をとらえた新風俗でした。では、これをデザインした人たちは、どのような思いを込めたのでしょうか。

そもそも霊柩車とは「遺体を葬祭場から火葬場まで運搬するために使う葬送用の自動車。かつては参会者の組んだ徒歩行列で死出の旅路が演出されましたが、火葬場の遠隔地化が進んだことから」導入、普及したものです。

一九二〇年代後半に登場した宮型霊柩車は、「近代化、都市化により変形を余儀なくされた葬列にかわるものでした。そのため、葬列の小道具などが、自動車の周囲のデザインとして取り込まれ、全国に普及していったのです。定型のない霊柩車のスタイルは様々で、「関東、京阪、中京、北陸南部」の四地区でのみ地方色がみられる」ものだったのです。それは米津工房がコレクションした全国の霊柩車写真一四五枚からもうかがわれます。

その後は、霊柩車が葬祭の産業化、近代的営業化の象徴とみられるようになります。「祭礼の山車を連想させるその意匠は近代化のゆきすぎを糊塗する外被」だったといい、豪華すぎる外見への批判ともなりました。

一九八〇年代には宮型を不快と考える声も次第に高まり、このタイプの霊柩車が葬祭場へ出入りすることを条例で禁じるところもでてきました。

厚木市上依知にある霊柩車製造会社JFCの前身であり、霊柩車シェア七〇%を誇っていた米津工房の米津三郎社長は、霊柩車のミニカー発売に際し、その考えを次のように述べています。

「このミニチュア霊柩車は「神宮寺型四方破風」と称しておりますが、葬には宗教が介入します。そこで私は神社にあらざる仏閣にあらざる言う建築様式と自動車とを結合させ荘嚴優美を保持し、且自動車としての諸法律に適した型としてこのようなもの（霊柩自動車）を完成させました。」⁽¹⁾つまり「宗教色を排したデザイン」というのがそのコンセプトだそうです。では、屋根の上など霊柩車のさまざまな箇所にかかる龍の意味はどうなのでしょう。これは「会社で作ったものではなく、クライアアントの要望に応じたもの」といい、その原型は龍頭という葬具の一種と考えられます。提灯、幡、天蓋などの竿の先につけて使用し、死者を護るものです。地域によってはタツ、蛇、獅子とも言います。厚木でも葬具としてみられます。

この大龍の出展者・今村勉（霊柩車製作会社JFC社長）氏の「大龍は高い位置に展示して下さい。上方から邪悪なものを睥睨し、亡くなった人を護るためです」という指示がありました。デザインの意味は明確に伝承されています。

霊柩車の前身である輿も棺を収納する葬具です。葬儀式の用語では輿ともいい、大八車、リヤカーに載せれば手引き霊柩車となります。厚木市でも多くの地域で使われ、写真も残されていますが、多くが廃棄されてしまいました。

展示に借用した輿は、瑞雲山龍峰寺（海老名市国分北）所蔵となるもので、設計図面などはありませんが、宮大工集団の半原大工（愛川町）の手になる



図2 輿（昭和43年 愛甲 石井準氏寄贈）

のではないかと考えられています。

近隣の寺院から譲られたとの伝承もありますが、一九二九（昭和四年）、半原大工棟梁の矢内稲雄が、龍峰寺本尊である千手観音（国重要文化財）の鎮座する本堂と庫裡の建築を手掛けているからです。海老名市の海源寺（同市新田）、諏訪神社（同所）なども稲雄の仕事です。その技術を受け継ぐ大光工務店（愛川町半原）の鈴木光雄社長は、この輿について次のように語ります。

「斗供、肘木などの斗組、懸魚もしっかりした作り。全体的に山車や神輿と同様だが、禅宗様式の花頭窓など社寺建築を踏まえた宮大工の仕事。彫物の少ない単純な造りのため白木ではなく、朱、緑などの塗り仕上げにしたのではないか」⁽²⁾

葬儀後、壊されたり、焼却されたりする葬具が多い中、残された道具は資料として保存する必要性が感じられます。

- (7) 井上章一『霊柩車の誕生』（朝日新聞社、1990）。
- (8) 井上章一『霊柩車』『民俗小事典死と葬送』（吉川弘文館、2005）。
- (9) 井上章一（7）。
- (10) 井上章一（8）。
- 当時は知識階級から「キツチュ」（いかもの）との批評を受けた。特に、上野の国立博物館の建物（近代建築の上にお宮が乗ったようにみえ、帝冠建築と称された）が「霊柩車のように」との批判はよく知られている。近年の再評価で、この帝冠様式による九段会館（千代田区）が改築に際し、文化財的意義が認められ保存されることとなった。（11）米津三郎「ミニチュア霊柩車発売に際して」
- （米沢玩具株式会社、1980）。
- (12) 今村勉氏談（2021.1）。
- (13) 鈴木光雄『半原宮大工 矢内匠家歴譜』（神奈川新聞社、2009）。
- (14) 鈴木光雄氏談（2021.9）。

三 「あの世」へ出立ち

あの世へ旅立つとき何を用意したらよいのでしょうか。実際に仕度のできない死者に代わり、残された人たちは何をすれば亡くなった人の思い

にこたえられるので
しょうか。厚木の人
たちの葬送儀礼を残
されたモノ、資料か
ら考えてみます。

座棺は、死者を納
める棺の一種です。
出展資料は専念寺
(温水)に未使用で残
されたものですが、
死者を屈位の姿勢で
納めるのでこの名前
があります。屈位に
するため死者の首か



図3 出棺(昭和43年 愛甲 石井準氏寄贈)

ら膝にかけて縄で縛りますが、その縄を極楽縄、不浄縄といい、縛るのは死者の近親者の役目とされました。厚木では寝棺への移行が早かったためか、死者を縛る伝承は聞くことができませんが、辛いことだったようです。この行為がなくなることで、埋葬場所を広く使われないこと、火葬の際にも効率的といい、寝棺の普及が進みます。かつて寝棺は、屈位にできない事故死者を除けば、富裕な家の者のみに使用されたものでした。それは、厚木出身の作家 和田伝の小説『深い墓』(昭和九年)の会話からもうかがわれます。図3は一九六八年、愛甲近辺の出棺の様子ですが、三十年ほど前の『深い墓』とほぼ同じ光景がみられました。しかし図4の一九三二年の及川の写真と比べると、参列者の服装に驚くほどの変化がみられました。

図4には忌中笠、三角ボウシ、ワタボウシなどがみられます。「白」という色も葬儀を象徴するものでした。女性のイロギはその代表で、死者や花嫁の衣服とも重なり、喪服と共用したところも多かったのです。

明治以降、洋装へ変化する中で民俗は変わっていきます。不祝儀を黒一色にした黒い礼服の導入、

普及の意味は大きい
ものでした。

色に対する意識
の変化は、厚木でも
みられ、喪服だけで
なく贈答の容器であ
るダイカイの色、喪
章などにも大きな影
響を与えました。

葬儀の全容を把
握するなら香典帳を
見るのが一番です。
香典帳とは会葬者が
ら喪家に贈られた香

典の金額を記録したもので、現金だけでなく、米や酒・野菜なども記されたからです。それは、半紙を二つ折りにして綴じた横帳に記録されます。村内の人が出す香典の額は金額が決まっております。香典返しのないことも多いのですが、地域社会を超えた家の付き合いの範囲が広がり、会葬者が増加するにつれ香典帳の果たす役割は大きくなりました。

香典帳は単なる金額の覚え書き、香典返しの基本となるだけでなく、他家との義理の覚え書きとしても重要な意味をもつようになったからで、出展された香典帳からも明らかです。

厚木では、亡くなった人との関係により香典、蒸物料としてオコワをダイカイ一荷(二個)または半荷(一個)分を贈ることになっており、付合の意味を考える上でも大事な記録となります。

(15) 大野一郎「書評『霊棺車の誕生』(井上章一著)『常民文化9』(成城大学日本常民文化専攻院生会議、1986)で石川県白峰村のマルケヤクを紹介した。(16)『厚木の民俗8人生儀礼』は、和田伝「深い墓」(早稲田文学社、1934)を抄録。(17) イザベラ・バード『日本紀

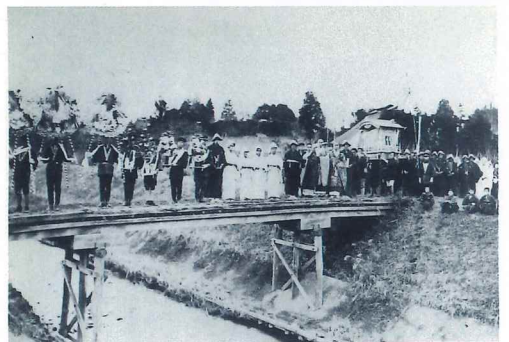


図4 出棺(昭和7年 及川 渋谷利雄氏蔵)

行(上)』(講談社、2008)。(18) 中村ひろ子「喪服」『民俗小事典 死と葬送』(吉川弘文館、2005)。(19) 大野一郎「及川地神講中の膳碗その他について」『南関東の共有膳碗』(関東民具研究会、1996)。(20) 大野一郎「ダイカイ考―贈答の容器をめぐる諸問題―」『民俗的世界の探求』(慶友社、1996)。

四 「永遠帰郷」の生命とは

展示会のタイトル「永遠帰郷の生命」は、宗教学者エリアーデの著書『永遠帰郷の神話』から拝借しました。企画意図である「他界」のイメージから人間存在の根本である「生命」観を考える上で最適と考えたからです。ここでエリアーデは、伝承社会を研究、理解するにあたり、「祖型と反復」の意義と機能を考える必要があると説きます。

「宇宙・神話論的に月の観念(時間の単位)において支配的なものは以前に在ったものの循環的再現」で、一言でいえば「永遠帰郷」。それは「宇宙的、生物的、歴史的、人間的」に「祖型的しぐさの繰り返し」のモチーフとして見出されるからです。

ここでエリアーデの視点と展示会のテーマが具体的につながります。つまり、盆、彼岸など、一定の時に繰り返し、死者がこの世へ戻る、訪問する時として考えられるからです。その時が「新年」である理由を、小島環禮は「新年」が「無時間の時間があるとき」だからとし、次のように説きます。

「時間」とは「一年の季節の変化」を入れると、一年周期で「輪」になったバネ状の観念。「輪」の形をとって永遠に続く図形に相当します。時間は、無限の彼方から見ると透視図法的に「ただの輪」となります。それはバネ状の時間を一年ずつに切り離すことになるのです。その「切れ目」を接続するのが「新年」。すなわち「新年」は「切れ目が生じる」「無時間の時間」だと説くのです。

「現在」には存在しないものとも「無時間」だから交流できるのです。その「切れ目」は太陽が回帰線に達した時「春分」「秋分」に置かれました。日本社会では「秋分」を主、「春分」を客としました。太陽の動きは家でも毎日観測することができます。

この「無時間」の時を日本では「秋分」に置き、中国暦の影響で盆行事となったというのです。

先祖を迎え、交流できる盆の時期、厚木ではスナモリを各戸の入り口に一对設置します。これも近年では簡易化されたり、一か所にまとめたりと変化を見せています。また盆を中心に行われる施食会（施餓鬼）も地区により変化は多様です。

盆、彼岸など「無時間の時間」に定期的に「この世」へ戻るだけでなく、完全に戻ってきてしまうことがまれにあります。死後、他の人間に生まれ変わるといふ「生まれ変わり」の観念です。葬送儀礼の中にこのような観念が見られるなど、多くの民俗事例がみられます。

生まれ変わりは、事実譚として盛んに語られてきました。展示資料「米津松蔵夢見履歴」もその一つです。佐渡へ流される日蓮上人を相模川で依知へ渡す渡守の再生譚となっています。

親の罪を暴く因縁話、魂の入れ替わり話など、再生譚話は広く流布しました。輪廻転生思想をもとにした説教が大きな影響を与えていたことが「夢見履歴」からもうかがえます。

輪廻転生の普及に大きな役割を果たしたのが閻魔王で、厚木にも十王堂、閻魔王像は多く見られ、展示した上愛甲の閻魔像は、本地仏の地藏菩薩とともに安置されています。

輪廻転生の考えは、展示会のサブタイトル「人はどこから来てどこへ行くのか」と大きくかわかり、その解決策の一つが転生、生まれ変わりの観念といえます。

仏教的教義では、輪廻転生は煩惱にとらわれた

結果です。転生の連鎖を断ち切り、解脱、悟りを開くことが重要だと説かれています。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上、転生の契機は因果応報です。その転生指標である地獄、極楽は、仏教界の絶好の布教機会。地獄絵、六道絵などで絵画化、絵解きされることで人々の心の奥深く浸透しました。十王に三仏を加えたものを十三仏といっています。十三回の追善供養（初七日〜三十三回忌）それぞれを司る仏として掛軸にした十三仏の画像は、法要だけでなく、あらゆる仏事の際に飾られます。

転生の最終目的である天上界（極楽）へ至るため、阿弥陀如来に救いを求め、死後の安楽を願う信仰についてみてきました。生まれ変わり、再生を願う「子墓」もその一つ。子どもは手厚く供養しませんでしたが、これは供養することで西方浄土へ送ってしまうのを避けるためでした。簡易に済ませることはありません。

図5は上愛甲の葉柳堂墓所「慶応二年寅五月十七日 光善童女」銘の船形光背をもつ墓石です。中央に香炉を持つ女の子の浮彫、台座に「永本長重郎子」と刻まれています。この墓石は、子どもも大人同様の供養がなされたことを意味しています。供養したいという気持ちですが、戻って欲しいという願いにまさったということでしょうか。

この墓石は子どもの葬送習俗が、供養と再生願望との間で揺れ動いていたことを語っています。

(21) エリアード著・堀一郎訳「永遠回帰の神話」(未来社、1963)。(22) 小島環禮氏による本展示のために書き下ろし。『猫

の王』(小学館、1966)でも同様の指摘。(23) 大野一郎「年中行事と寺院の行事」『神・人・自然 民俗的世



図5 光善童女墓

界の相貌」(慶友社、2010)。(24) 『日本民俗史事典』(弘文堂、1994)。(25) 『聖地と人との結縁システム 出開帳』(厚木郷土資料館、1999)。(26) (24) と同じ。(27) 中村昌治「北相模の子墓」(神奈川の民俗)(有隣堂、1968)。

おわりに

企画展示「再生・永遠回帰の生命」の展示解説、企画意図の紹介という形で、文化財の一つとして郷土の民俗を考えてきました。それは、自らの来し方行く末を考えることにもつながります。

例えば他界観。大山への山上他界観がある厚木の人はしあわせです。亡くなった後も、ふるさと近くにとどまることができのですから。同様の考え方は、小高い丘、高台に多くみられる、戦死者を祀る忠魂碑の設置場所などからもうかがえます。

郷土博物館のミッションの一つは「郷土愛の涵養」、つまり郷土を知ることを通じ、愛着を染み入るように身につけていただくことにあります。これを突き詰めていくと、最後には地域の「他界観」への共感に行き着くのではないのでしょうか。最後のその時まで郷土で過ごすことです。

その観点からも、文化財調査、報告、そして博物館の展示会、講座は重要な意味をもつと考えられます。文化財の力は大きなものではないのかもしれませんが、「人間存在」の根本にかかわるものだからです。

厚木市史たより 第24号

令和3年3月30日発行
編集 厚木市教育委員会文化財保護課
発行 厚木市
住所 神奈川県厚木市中町三一七―一七
電話 〇四六・二二五・二〇六〇
FAX 〇四六・二二三・〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しております。